

アンケート調査に見るパソコン利用状況

— 司書教諭講習受講生を対象とした —

皆 上 勝 哉

はじめに

平成9年6月学校図書館法が改正され、司書教諭設置の特例が撤廃された。平成10年3月の学校図書館司書教諭講習規程の全面的改正に伴い、履修科目は5科目10単位となり、まだ解決されねばならない問題点はあるにしろ、学校図書館は新たな局面を迎えたと言える。講習科目のねらいと内容をみると、学校図書館のなかで如何に情報メディアを活用するかに力点がおかれている。コンピュータを利用した教育用ソフトウェアの活用、データベースと情報検索、インターネットによる情報検索と発信などがとり挙げられている。情報メディアの活用には、これまでの読み、書き、算盤という「リテラシー」の上にコンピュータを操作・使用できる技術としてコンピュータリテラシー、情報を素早く的確に入手する技術としての情報リテラシー、多様なメディアの中から適切なメディアを選択するためのメディアリテラシーなどが基本的に求められる。

数年前から、大分県教員採用試験にコンピュータに関する知識・技能試験が付け加えられたが、コンピュータが如何様に学校現場に導入され、使用者の教員はどの様に利用しているかを、学校図書館司書教諭講習におけるアンケート調査を基に考察してみた。

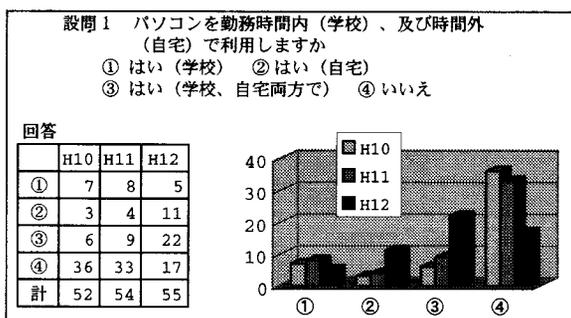
I 学校図書館におけるコンピュータの配置・利用状況

学校現場におけるコンピュータの配置状況や学校図書館への導入状況について、平成8年度から学校図書館司書教諭講習の受講者に対するアンケート調査を行い、その結果を「大分県学校図書館の現状」*1や「大分県高等学校図書館における電算化の現状」*2として発表した。平成12年度も同様のアンケート調査を学校図書館司書教諭講習受講生に行ったが上記論文の発表時とさしたる相違はなかった。

II 学校図書館司書教諭講習受講者のパソコン利用状況

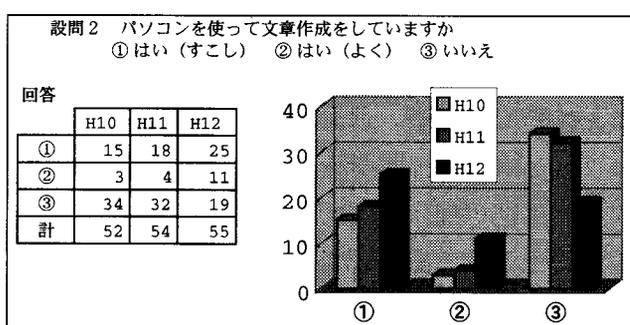
学校図書館司書教諭講習の受講者（以下「受講者」という）は、パソコンをどの位日常的に使用しているのだろうか。学校図書館司書教諭受講資格は、「教育職員免許法による教諭の免許状を有する者又は大学に2年以上在学し62単位以上を習得した者」とされている*3。従って受講者のパソコンに対する使用度・習熟度は、一般的にハイレベルにあるとも想定されるが、大分県下におけるパソコン使用状況の一端を知る方途と考えられるので、平成10～12年のアンケートをまとめてみた。

設問1 ① パソコンの学校での使用頻度は3年間であまり変動がみられないが、② 自宅での使用度は急激に増加している。③ 学校、自宅両方の使用度も増加している。④ パソコンを全然使用しないの回答度は前回に比して非常に減少した。総体的にいえることは、平成12年にパソコンが家



庭の中に浸透し使用され始め、その結果職場での使用頻度も多くなってきている。パソコンが家庭に浸透し始めた背景には、前年において20万円程度していた商品の価格が半分近くまで下がり、最近では10万円を切る商品も出回り、高額商品ではなくなり、必需品とまではゆかないが、身近な道具となり、購入意欲をかき立てた。

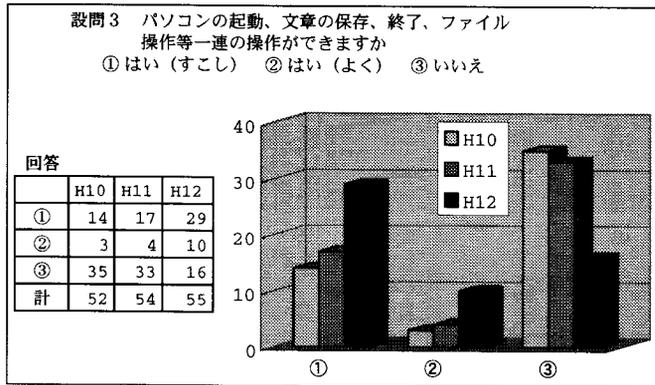
パソコン関連企業の好調が、景気を押し上げる原動力ともなり、最近では「IT」という活字が新聞紙上賑わせ、インターネットやe-mailのコマーシャルがテレビで放映されこの趨勢を助長してる。



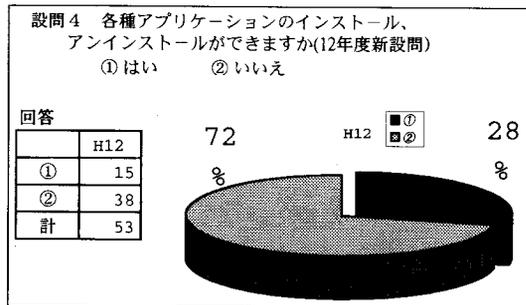
設問2は、客観的な回答の尺度がなく、①のはい(すこし)と②のはい(よく)との間はデジタルでなくアナログで回答者の主観により、①と②は選択に困り揺れ動くが、①と②は、③に移動することはなく、このことは、設問1の回答と同じ傾向をしめしている。平成11年度では、「はい」全体で40%であったのが、12年度では65%

と上昇して、過半数の人がパソコンを利用して文章などの作成をしていることを示している。

パソコンでの文章作成の際重要な項目として、タイピング能力がある。従来の「リテラシー」のうち文字を書く能力スピードが非常に遅く、たどたどしければ、「イリリテラシー」と言える。同様にコンピュータへの入力手段としてのタイピングがたどたどしければ、文章作成が非常に苦痛になり、コンピュータの前に一定時間座るのさえストレスが生じる。タイピングの能力がコンピュータリテラシーの第一歩と言える。欧米からの留学生(高校生を含めて)と日本の学生とのタイピング能力を比較すると、表現は古いが、留学生は機関銃で、日本の学生は火縄銃か早くてもピストル程度のスピードである。昭和50~60年代までであれば、彼らは横文字の国、英文タイプの国でタイピングの早いのは当然であったが、今日コンピュータの利用に関して、彼我の間に差はなく、差はタイピングに対する取り組みだけである。小学校入学前後から読み書きを勉強するように、また自転車に乗る練習を一生懸命にするように、タイピングも早い時期に修得したほうが効果的である。タイピング自体は、コンピュータリテラシーの中でも手段であって目的ではないが、手段そのものが稚拙であれば、目的もなかなか達成出来ないと言える。大人の今からでは遅いかとの質問に対して、練習する意欲さえあれば、小さいときに練習するよりも時間はかかるが遅くはない。幸いにも昨今楽しく練習出来るタイピングソフトがいくつもパソコンショップに陳列されている。



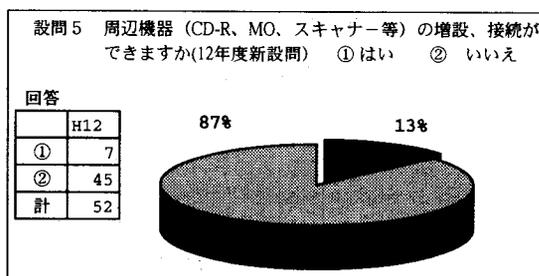
設問3においても、設問②と同様主観的な回答方式であるが、「はい」の比率が、12年度で逆転している。ファイル操作にも自信を持ってきている。



設問4 各種のアプリケーションソフトのインストール、アンインストールができないと、お仕着せの服を毎日着ているようなもので、パソコンが単なる機械に終始して、味気ないもので、購入時のままのソフトしかインストールされていなければ、早晚パソコンは無味乾燥の単一処理機にしか過ぎなくなる。今年は年賀状のソフトをインストールして、気分を変えてパソコンで挨拶をする。更に、工夫を凝らして挨拶文にお気に入りの写真や絵を貼り付ける。ゲームは勿論囲碁、将棋のソフト、家計簿等各種のソフトをインストールすることで、パソコンは面白い機器に変容する。ソフトのインストールがパソコンライフ充実の第一歩である。

また統計でみるかぎり、ソフトのインストール出来る人の方が少ないが、自前のパソコンを持てば、直ぐに新しいソフトをインストールして何かをやりたくなるのが自然であり、自前のパソコンを持つことが基本的に大事なことである。興に乗ってあまり多くのソフトをインストールすると動きが遅くなったり、容量の限界を超えるとインストールを拒絶されたりするようになる。その場合、必要の無くなったソフトをアンインストールすればよいが、時には失敗して、必要なソフトまで削除することもあるが、その失敗はソフトの(アン)インストールの技能を向上させることになる。

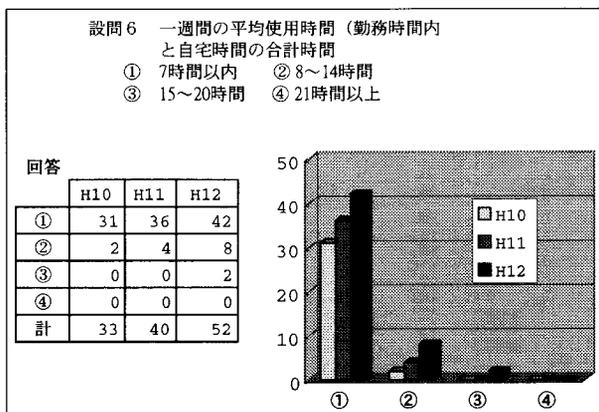
また統計でみるかぎり、ソフトのインストール出来る人の方が少ないが、自前のパソコンを持てば、直ぐに新しいソフトをインストールして何かをやりたくなるのが自然であり、自前のパソコンを持つことが基本的に大事なことである。興に乗ってあまり多くのソフトをインストールすると動きが遅くなったり、容量の限界を超えるとインストールを拒絶されたりするようになる。その場合、必要の無くなったソフトをアンインストールすればよいが、時には失敗して、必要なソフトまで削除することもあるが、その失敗はソフトの(アン)インストールの技能を向上させることになる。



設問4のソフトのインストールができ、パソコンを多彩に使用し始めると、作成したファイルも多くなりパソコン本体のハードディスクだけでは、容量が不足してくる。また作成したファイルを保存したり、友人に渡したりするときの手段として、CD-R/W、MDディスクなどのリムーバブルな補助

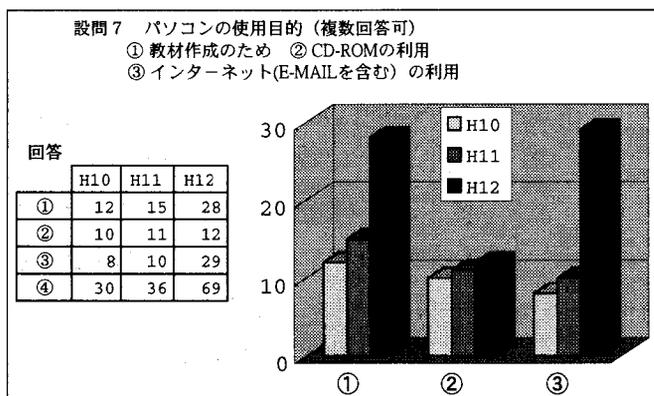
記憶装置としての周辺機器が必要となる。紙に印字された情報を取り込むためのイメージスキャナーもあれば便利な周辺機器である。最近デジカメの性能がアップし、高額商品でなくなり、軽量で携帯に便利であることから、売れ筋商品となり、特に自分で撮った写真をe-mailで送信するときなど非常に便利である。特にフィルムスキャナーやデジカメを使用することでこれまでの紙の写真アルバムから電子アルバムに媒体が変化する。これらの周辺機器は、パソコンに接続する場合若干の

設定が必要であるが、マニュアルを参照すれば、始めてでも接続が可能である。周辺機器の増設は是非会得したい技術（技術というほどのものではない）であり、パソコンライフはさらに多彩になってくる。



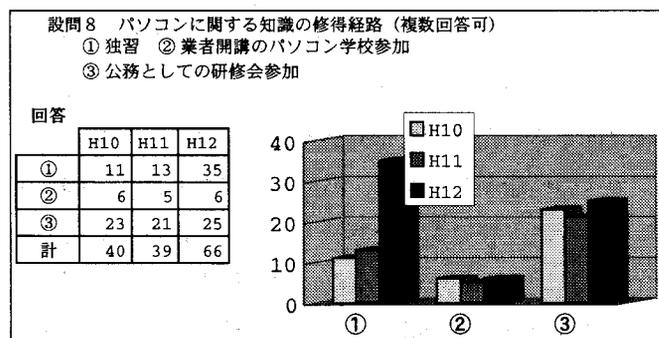
となると職場と家庭の両方にパソコンがなければ、余暇時間に余裕があるか、趣味がパソコンでなければ、難しい数字であり、まして3時間ともなると困難な数字である。だんだんとパソコンが職場と家庭の両方に置かれていることを反映した数字といえる。

設問6 パソコン使用率が年度毎に上昇していることはこれまでの数値で明白であるが、時間で捉えると、週に7時間以内は大きな変化はないが、多少は増加している。週に14時間以内の人は着実に増加し約15%の人が1日平均2時間程度使用している。更に週に20時間以内の人も4%弱となっている。1日に1時間程度であれば、職場か家庭のどちらかで使用する時間的余裕はあるが、2時間以上



受信のみならず、自分から情報の発信も行えるし、趣味を同じくする人たちが集まりチャットを楽しむ、またネットによる買い物は、ディスカウントショップよりも安く入手出来る。航空券も、各種の催し物のチケットしかりである。この傾向はさらに今後急速に進展し続けるものと考えられる。

設問7においては、①が2倍に、③は3倍に増加している。①については、職場にパソコンが配置されていつでも使用可能であり、操作の習熟によって、使用回数が増加したものと想定される。③はまさに急増といえる数字であるが、昨今のインターネット利用者の爆発的増加を反映している。インターネットは、欲しい情報をより早く入手するという、情報の



設問4の各種のソフトのインストールとインターネット、e-mailの接続により、パソコンは、暇さえあれば、又は毎日使用する或いは使用しなければならない機器に変容する。

設問 8 では、知識の修得経路に関する質問であるが、30代後半以上の人たちは、工学関係者以外では、一般的にコンピュータリテラシー教育を受けていない。そのような人たちがコンピュータリテラシーを持つにいたった経緯を考察すると、大多数の人たちが、職場にコンピュータが導入されることから、必要に迫られ、公務による研修会でごく概略的な知識を修得し、後は自学自習で修得するしか方法がなかった。現在販売店の開く簡単な講習会以外に、体系的に教えてくれる、パソコンスクールも開設されている。しかし、要はやはり習うよりも慣れるで試行錯誤の独習が最善の方法であろう。

あとがき

コンピュータが目的でなく、手段だという声があるが、事実である。目的と手段は、視点を変えれば、手段は目的に変わる。学校教育も人生にとって手段であって目的ではない。

学校教育を目的とするならば、手段は日常の学校生活であり、カリキュラムの達成であろう。日々の学校生活は手段であるカリキュラムの達成を目的として努力している。手段だからといっておろそかにはできない。技術そのものは、目的を達成するための手段であるが、個々の手段をおろそかにすれば、最終目的の達成はおぼつかない。人間が目的を達成するためには、的確な情報を得る必要がある。情報の質・量が目的達成の鍵を握る。

人はよく旅をする。旅をする場合にも、旅程・目的地の状況など各種の情報を得ることが必要であり、情報の質・量が旅の楽しさを左右する。情報収集の方法を、これまではガイドブック、パンフレット、時刻表、電話に依存していたが、ガイドブック等は出版されてから日時の経過したものが殆どであった。現在の旅行の情報収集はパソコン上で旅先の詳細な最新情報、交通情報を入手し、切符や、宿泊先の予約も行う。特に花や紅葉を観る期間限定の登山は、最新の情報を入手しなければ意味がない。図書の発行年は相当古く、雑誌も一年まえの記事を恰も今年であるかのように記載している。紅葉は天候に左右され、1週間以上ずれることが多い。その時各地からのネット上に発信される情報が威力を発揮し頼りになる。

沖縄サミット以来「IT」という文字が新聞に殆ど毎日掲載され、単に情報産業界の関連記事ではなくなってきた。「情報」が産業社会のみならず、社会全体を動かす重要な「資源」として認識されてきた。今後急加速的に情報化が進むことは必然である。情報化の進展は、これまでの「リテラシー」を基礎にして、「コンピュータリテラシー」、そして氾濫する情報のなかから自分が必要とする情報を素早く的確に入手する技術である「情報リテラシー」を、21世紀を生き抜くために、修得することを求めている。

(あざかみ かつや 別府大学)

- * 1 『学校図書館』 558号 p.34～40 全国学校図書館協議会 1997
- 『学校図書館』 559号 p.49～52 " 1997
- * 2 『学校図書館』 579号 p.65～69 " 1999
- * 3 『学校図書館司書教諭講習規程』 第2条